

臨床セミナー申込について

- 定員数：80名(先着順)
- 対象者：臨床心理士・公認心理師・医師などの専門家、大学院生、研修生事例に関する情報の守秘を厳守できる方
- 受講料：5万円(大学院生、研修生は4万円)

■申込み方法

下記URLから申し込みフォームにて必要事項をご記入ください。

<https://forms.gle/Q2K99aS6pHNeZsG96>

※申し込み内容を確認の上、改めてお振込み先と参加費をご案内いたします。
rinsemi@sacp.jpからのメールを受信できるようにしておいてください。



■基礎の基礎セミナー申し込み

申し込みサイトの「基礎の基礎セミナー希望」の欄にチェックをしてください。

現地とオンラインの参加合わせて先着順(定員15名)となっております。

初回参加の方を優先させていただきます。

後日、受講方法と受講料のお支払いについてご連絡いたします。

※参加費を、臨床セミナー費と一緒に振り込まないでください。

申込締切：2022年10月31日(月) ※先着順なのでお早めにお申込みください

サポチル会員 募集中！

現在(2022年5月末)、ボランティア会員9名、専門会員170名が、サポチルの研修プログラムへの参加をはじめ、研修会の企画運営、広報事業などに携わっています。サポチルの活動への積極的なご参加をお待ちしています。申込方法は、Webサイト【<http://sacp.jp>】をご覧ください。

また寄付により、子どもの心理療法の料金を支援していただく賛助会員も募集中です。2022年5月末現在で寄付者303名の方にご支援をいただいている。寄付はWebサイトからのクレジットカード決済、もしくは郵便振替(一回5千円より)によって可能です。

- Webサイト【<http://sacp.jp>】「サポートのお願い」のページをご覧ください。
- 郵便振替 【口座番号:00990-0-192194 NPO法人子どもの心理療法支援会寄付金】

多くの方のご寄付により、経済的理由で心理療法を受けられないお子さんに心理療法を提供することが可能となっております。
ご支援、ご協力をいただきますよう、どうぞよろしくお願ひいたします。

みんなの協力で、子どもたちが心のケアを受けられる社会へ。



認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 事務局

e-mail:info@sacp.jp URL:<http://sacp.jp>
〒604-8187 京都市中京区東洞院通御池下ル笠屋町444初音館302
FAX:075-600-3238

2022-2023年 京都精神分析・臨床セミナー 運営スタッフ

臨床セミナー 林秀樹(基礎の基礎セミナー)
運営スタッフ 大原咲子 堀内瞳
村田りか 松崎佑亮
山本梓

理 事 吉岡彩子
井上祐(臨床セミナー担当)
竹田駿介(臨床セミナー担当)
久永航平 脇谷順子
河邊真千子 小笠原貴文
西村理晃 藤森旭人
吉沢伸一 小島香織

理 事 長 平井正三
副理事長 津田真知子
顧 問 鵜飼奈津子 飛谷涉
監 事 鈴木誠



サポチル 認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 主催

2022-2023年

京都精神分析・臨床セミナー

ごあいさつ

精神分析は、医療の中から発展してきており、その位置づけはかつてほどではないにしても、今日でも精神科医療の中で一定の役割を果たしています。医療領域以外の臨床現場においても、精神医学的視点は常に重要であり、精神科との連携は必須の場合もあります。

今年度のセミナーでは、代表的な精神医学的状態を取り上げ、それらが精神分析においてどのように理解していくのかを考えています。さらに、精神病理学的理解との対話を試みたり、臨床現場での精神分析的アプローチの工夫について考えたりしていきます。

精神病理学的理解は、発達様式との関連で理解できるという視点をフロイトが最初に示して以来、進展著しい神経科学の発展も織り込みながら多様な変遷を遂げてきました。特にその症状理解は神経科学的見地が多くを占めるようになりましたが、人はその症状に困るのではなく、よりパーソナルな困難を有しています。関係性の中からその人をより理解していくことは、その困難感を考える臨床家にとっても非常に重要なことであると思われます。

本セミナーでは、そうした人間理解に关心のある多くの臨床家の参加を期待します。

認定NPO法人子どもの心理療法支援会 理事長 平井正三

今年度のテーマは、「診ると観るの交わるところ—症状と精神分析—」

第1回 2022年11月13日(日) 衣笠 隆幸先生 「精神医学的症状を精神分析的にどうとらえるのか
衣笠先生はオンラインでのご講義となります。」

第2回 2022年12月4日(日) 平井 正三先生 「うつへの精神分析的理

第3回 2023年2月26日(日) 横井 公一先生 「対人関係/関係精神分析の解離へのアプローチ」

第4回 2023年4月23日(日) 内海 健先生 「ADHDの理解を深める—精神病理学的観点から—
この回は13~18時 木部 則雄先生 「発達障害のこころの発達」

第5回 2023年5月14日(日) 奥寺 崇先生 「「アセスメント」の謎」

第6回 2023年7月9日(日) 若佐 美奈子先生 「精神分析的態度・アセスメントの低頻度面接への応用
この回は13~18時 武藤 誠先生 「アセスメント=面接頻度を考える」

臨床セミナー開催日の午前中(10:30~12:00)に「基礎の基礎セミナー」を開講します

第1回 平井 正三先生 「導入:精神分析とは何か?」

第4回 飛谷 涉先生 「青年・成人の精神分析臨床:基礎の基礎」

第2回 鵜飼 奈津子先生 「タビストック方式乳児観察:ビデオと解説」

第5回 津田 真知子先生 「心理療法を精神分析的に行うことの諸問題」

第3回 鵜飼 奈津子先生 「子どもの精神分析臨床:基礎の基礎」

第6回 平井 正三先生 「終結:ふり返りと研修プログラムの説明など」

参加費

臨床セミナー(全6回受講) 5万円 (※振り込み) 大学院生、研修生の方は4万円で受講いただけます。

今年度から、会員以外の方の単回受講もお受けいたします。
ただし、臨床心理士の研修ポイントの対象とはなりません(全回受講者のみ申請予定)。単回受講は1回1万2千円
会員、大学院生の方は1万円で受講いただけます。(※振り込み)

基礎の基礎セミナー(全6回受講) 1万円 (オンライン受講も可能です)
※詳しい申込み方法は最後のページをご覧ください。

時 間

各回 13:00-17:30

●前半2時間【講義】 ●後半2時間半【事例検討】
第4回、第6回は13時~18時です。

会 場

第1回・第5回・第6回 ハートンホテル京都
第2回・第3回・第4回 ハートピア京都



*現地開催・オンライン両方でのハイブリッド開催を予定しています。ご参加の形態によって、ポイントの扱いが異なる場合があります。ご留意ください。
*新型コロナウイルス感染症COVID-19の影響を鑑みて、オンラインのみの開催となる場合があります。

2022-2023年 京都精神分析・臨床セミナー スケジュール

★講師が挙げている参考文献は講義内容を補うものです。

第1回 2022年11月13日(日)	精神医学的症状を精神分析的にどうとらえるのか —精神医学的アセスメントと精神分析的アセスメント—	衣笠 隆幸 先生
精神医学の診断のDSM、ICDの診断の方法や、基本的な診断法の紹介を行います。精神分析的な診断は発達論を基調にしておりますが、私が紹介するのは英国のタビストック研究所成人部門において指導を受けたものを紹介したいと思います。		

参考文献 Steiner,J. 「心の退避」特に第3章、岩崎学術出版 1997 (衣笠監訳)

ご所属 広島精神分析医療クリニック

第2回 2022年12月4日(日)	うつへの精神分析的理解	平井 正三 先生
----------------------	-------------	----------

本講義では、うつについての精神分析的アプローチを概説します。抑うつ状態は、精神分析的心理療法の効果研究が実施され、エビデンスが出ている代表的な臨床領域です。本講義ではそうした現状を踏まえて、フロイトから始まり、アブラハムを経てクライン、そして現代クライン派へと続く、うつの精神分析的理解をみていきます。そして、そうした古典的な抑うつ状態とは異なる、自己感の希薄さや空っぽさなどと関わる抑うつ状態、さらに解離や離人症、そしてAS傾向と関わる抑うつ状態など、現代の臨床で頻繁に遭遇するうつの問題もとりあげていきます。

参考文献 フロイト『対とメランコリー』(1917)『フロイト全集14』
クライン『躁うつ病の心因論への寄与』(1935)『対とその躁うつ状態との関連』(1940)『メラニー・クライン著作集第3巻』

ご所属 御池心理療法センター／サポチル

第3回 2023年2月26日(日)	対人関係/関係精神分析の解離へのアプローチ	横井 公一 先生
----------------------	-----------------------	----------

ピエール・ジャネによって提唱された解離の概念は催眠下の精神状態やヒステリーや神経衰弱症の精神病理を理解するうえでの重要な概念となりました。しかし今日では、解離という現象は精神病理としてあらわれるものから正常な心の働きとして認められるものまで、幅広い現象を含み込むものとして理解されるようになってきました。現代の対人関係/関係精神分析の理論家たちは、解離という概念を、人が生きていく上での困難を理解してそれを解決していく上での鍵概念として考えようになってきています。本講義では、場の理論に基づいて解離を精神病理の源として考えたサリヴァンの対人関係論を嚆矢として、ミッケルの多重の自己の理論を経て、ブロンバーグやドナル・スタンら対人関係/関係精神分析の理論家たちの解離理論に至るまでを簡略に概説します。

参考文献 「関係するこころ：外傷、癒し、成長の交わるところ」フィリップ・M・ブロンバーグ著、吾妻社訳、誠信書房、2014
「精神分析における未構成の経験：解離から想像力へ」D.B. スタン著、一丸 藤太郎訳、誠信書房、2003
「精神分析における解離とエナクトメント：対人関係精神分析の核心」D.B. スタン著、一丸 藤太郎訳、創元社、2014

ご所属 微風会 浜寺病院

第4回 2023年4月23日(日)	ADHDの理解を深める—精神病理学的観点から—	内海 健 先生
----------------------	-------------------------	---------

近年、我国の精神科臨床においては、ADHDへの関心が急速に高まっています。その背景には、青年期や成人期に事例化する人たちへの関心や、薬物療法の発展などがあると思われます。他方で、決定的な所見や生物学的マーカーのないことから、ともすれば過剰診断になる傾向もしばしばみかけます。とりわけADHDの場合、同じ発達障害のASDがKannerやAspergerといった古典的な臨床記述が利用できるのに対して、精神病理や心理臨床的なアーカイブにおいて圧倒的に乏しいことが憂慮されます。今回の講義では、こうしたADHDに精神病理学からアプローチを試み、不注意症状やいくつかの重要な特性の成り立ちについて考察を加えてみたいと思います。

参考文献 Anita Thapar, Miriam Cooper: Attention Deficit and Hyperactivity Disorder. Lancet 387: 1240-50, 2016
Sari Solden: Women with Attention Deficit Disorder. Underwood Books, 2007
星野仁彦: 知って良かった、アダルトADHD. ヴォイス、2004
内海健: 自閉症スペクトラムの精神病理. 医学書院、2015

ご所属 東京藝術大学名誉教授

発達障害のこころの発達	木部 則雄 先生
-------------	----------

ボーラ・ハイマンは「大論争」で、乳児期早期の母子関係での授乳における投影と摂取によりパーソナリティの中核が完成することを語った。乳児期のASD児は、この時期に自他未分化であるために投影も摂取も生じることがない。その後、幼児期のASDでは、投影<摂取というバランスの中で成長する。さらに、思春期のASDでは、投影が活発になるが、これはコントロールできない乳幼児の特質のある投影である為に、被害妄想的世界が展開し、破綻する。その一方、ADHDでは、投影>摂取の世界が展開し、多動、衝動性などに加えて、ASDとは異なる一方的なコミュニケーションが問題となる。このADHDの病理は、精神分析における解釈は摂取されることがないために、精神分析の適応ではないと考える。こうした論点から、発達障害のこころの発達について論じる。

参考文献 「子どもの精神分析」(岩崎学術出版社) 「子どもの精神分析II」(岩崎学術出版社)

ご所属 こども・思春期メンタルクリニック／白百合女子大学 発達心理学科

第5回 2023年5月14日(日)	「アセスメント」の謎	奥寺 崇 先生
人と人とが会う、と言えば聞こえは良いが、治療者は専門性、多くの場合は業務(すなわちビジネス)の中で活動しており、患者(クライエント)には切迫した事情がある。この到底対等とは言えない社会的状況の中にもかかわらず(というべきだろう)、「出会い」あるいは「生きた心の交流」といったメタ心理学的なコミュニケーションは発生する。そこには「溺れる者は藁をもつかむ」から「のっぺらぼう恐怖」までさまざまな種類の交流、さらに「主に治療者の側の問題により交流が起こらない」ということも含める多層的な動きが起きているのだろう。その場に介在する二人それぞれの心の中に尾を引いているまだ遺跡になっていない生傷や、裏切りによって封印された発達の様々が影響しあっているのである。		

参考文献 精神分析的心理療法におけるコンサルテーション面接 P. ホブソン編著 福本ら訳 金剛出版
ご所属 クリニックおくでら

第6回 2023年7月9日(日)	精神分析的態度・アセスメントの低頻度面接への応用	若佐 美奈子 先生
週4回以上が標準とされる精神分析の営みから生まれた豊かな知見を、低頻度の面接にそのまま活かすことは極めて困難だと言わざるを得ません。精神分析で重視されるセラピスト－クライエント間の関係性の質が異なるからです。それでは、現場の事情で、毎週面接や45分以上の面接ができない場合、どんな工夫をすれば、精神分析のエッセンスを用いた理解や介入ができるのでしょうか。本講義では、週2回の面接、週1回の面接、隔週の面接、月1回の面接の素材を比べ、どこに注意を向けてアセスメント・介入していくことができるか、その有用性と限界について、皆さんと一緒に検討していきたいと思います。		
参考文献 北山修監修、高野晶編著(2017)『週1回サイコセラピー序説 精神分析からの贈り物』創元社 Salzberger-Wittenberg, I. 平井正三監訳(2007)『臨床現場に生かすクライン派精神分析 精神分析における洞察と関係性』岩崎学術出版社		
ご所属 神戸女学院大学大学院人間科学研究科／西天満心理療法オフィス		
アセスメント⇨面接頻度を考える		
精神分析的心理療法を行うにあたって、面接頻度の設定はクライエントと治療者との関係性や、取り組む問題の深度、治療関係の維持などに影響をおよぼす大きな課題です。今回のセミナーでは、面接頻度を決めていくにあたり、どのような視点を持ってアセスメントを行う必要があるのかを検討し、参加者と共に考えたいと思います。一方で、現在、さまざまな要因(現場の制約、治療者の制約、クライエントの制約)によって、面接頻度が限定的になる現場が多くなってきています。週1回50分の面接も確保するのが難しく、隔週、月1回、あるいは1回30分の面接も増えているようです。その場合、可能な面接頻度から、その心理療法において取り組めること、配慮すべきことを判断していく必要があります。アセスメントを通して面接頻度を考える方向と、限定された面接頻度からアセスメントする方向とについて私の医療現場の経験も踏まえて検討していきたいと思います。		
参考文献 北山修監修、高野晶編著『週1回サイコセラピー序説』創元社、2017		
ご所属 むとう心理療法オフィス		

■ 研修ポイントについて

当セミナーは、日本臨床心理士資格認定協会の「定例型研修会(4ポイント)」として承認されています。
5回以上出席の方に「研修証明書」をお渡しいたします。



認定NPO法人 子どもの心理療法支援会 事務局

e-mail:info@sacp.jp URL:<http://sacp.jp>

〒604-8187 京都市中京区東洞院通御池下ル笹屋町444初音館302

FAX:075-600-3238